



1636年～1869年(約230年)

伊予西條藩を知る ⑬

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家

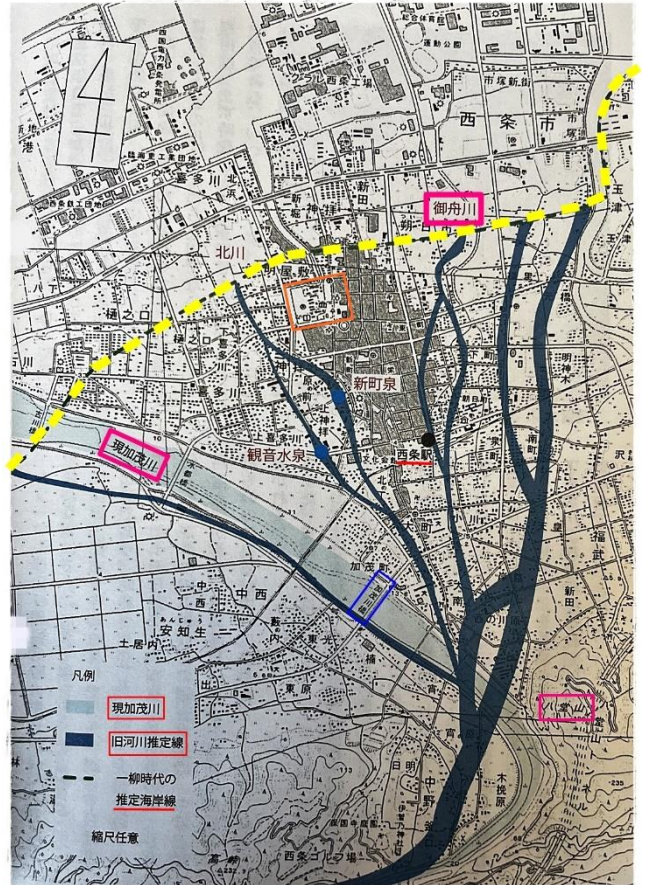


寛永13年(1636)三万石を領して西條に入部した2代藩主一柳直重は、西條藩陣屋建設に際して、加茂川乱流の痕跡と思われる喜多川及び新町川の流路を変えて、新規に掘った陣屋の堀に引き入れ、本陣川を開削して海に排出した。

加茂川は、古くは神戸・釜の口より大きく左に蛇行し、木挽原の東側を流れて北方向に何筋にも分散乱流し、加茂川の改修前は八堂山付から神拝方向に流れる筋と御舟川へ流れる筋があった。その内の主流は、八堂山あたりから西の川原を北へ流れ御舟川方面へ乱流し、台風による大洪水で暴れ川となり、たびたび人が流されたり農作物被害もたらした。

八堂山から北へ向かった地域の地名が、釜の口、川原、前川原、西之川原、岸陰、小川、清水、善恵川など、大町から西には川原町、喜多川、上川原、古川などの川にちなんだ地名が残されている。

第一次西條藩一柳氏の入部以前にも加茂川の氾濫防止への努力がなされていた。慶長年間二年(1596～1615)、光明寺の六代僧入江常真が改修工事(水害を防ぐ改修)を嘆願し、**足立重信**(伊予松山藩城主・加藤嘉明の



重臣)によって治水工事(設計指導)が実施された。加茂川の流れを一度、八堂山にあてて、勢いを弱めそのまま西方向(古川)に付け替え、大町を中心とした民家が守られ水害は激減した。(『西條市誌』)

※僧**常真**は、讃岐国多度郡広田村生まれで、松山藩主**加藤嘉明**が新居郡を統治し始めた頃(慶長5年頃)この地に来往し、大町村で寺地を拝領したと伝える。(『西條誌』)「**大町常心**」と言う地名は、入江常真の功を讃えて名づけられ今に残っています。また、口碑によれば、彼が寺地を拝領したのは、加茂川改修の攻による。

※伊予松山藩**足立重信**の名は、重信町(現東温市)、重信川(旧伊予川)の名となり残っている。

※**水越**(みづこし)と**水吐**(みづはき・みと)とは、「水越、堤の中に此名あり、是は加茂川洪水の時、川の東の堤、水溢れ、危く見ゆれば此水越の堤を崩して、水を西に分ち、水・御殿を衝突するの患いなからしめんが爲也(中略)水吐、と称する地あり、字、喜多右衛門新田の内の堤也、此水吐は、かの水越より岐れ入れ、沼ひ溢る水を爰の堤を壊り、海へ導き帰せしむる也、総て此辺の普請、精巧を尽したる事にて来り見て其巧なるを知べし」と西條(藩)誌古川分の条にある。水越、水吐ともに長さ三十八間(69m)、底を石だたみにして非常時にそなえて陣屋・城下町・武家屋敷を守った。(『西條誌』)

(参考資料)：愛媛の記憶(愛媛県生涯学習センター)、西條市誌(西條市)、西條(藩)誌、水の歴史館(西條市)、